
靈幻彼氏

南 晶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

靈幻彼氏

【Zコード】

Z8925Z

【作者名】

南 晶

【あらすじ】

クリスマスイブに恵理が電話で呼び出した元カレ、孝之。イケてる外見に合わせず頑固で一途だった孝之を10年前に捨てたのは自分だった。

イブの夜に孝之と再会し夜を共にした恵理は、別れた事を後悔するが、時既に遅し。

孝之は3年前に死んでいたのだった。

前に書きました短編『クリスマス・イブ』の続編です。

1 (前書き)

季節限定で書きました短編『クリスマス・プレゼント』の続編です。宜しければ、そちらもご覧下さこま。

「いらっしゃいませ～！恋人にチョコレートはいかがですか～！？」

時は寒さ本番の1月末。

地元の百貨店の入り口で、あたしは寒さに震えながらワゴンに入ったチョコレートを売りつけようと、声を枯らしていた。

たった2ヶ月前まで大阪で出版社に勤務していたあたしが、何故、田舎の百貨店でバレンタイン商戦のアルバイトをしているのか。答えは簡単。

会社が倒産したからだ。

結局、あたしは仕事が失業した今、大阪で一人暮らしをしている理由がなくなつて、実家に帰つてしまつたのだ。

失業保険が出ている間は、定職に就く訳にはいかないので、こうやつてスポット的なアルバイトを職安で斡旋してもらつては日当を稼いでいる毎日だった。

今までの貯金があるのと、実家にいるのとで、差し迫つて生活費に困るわけではないが、35歳の独身女性がいつまでもこの状況ではマズイと自覚はしていた。だからと書いて、この年になつていきなり正社員の仕事は見つかる筈もない。

今の所は就職活動をしながら遊んでいるよりはマシなこのアルバイトを2月14日まで入れてしまつたのだった。

「松本さん、メチャクチャ寒いですね～！あたし、もう凍え死ぬかも～」

一緒にバイトに入っている女子大生の鈴木裕香ちゃんがガタガタ震

えながら、手を擦り合わせて泣き声を上げた。

「頑張るのよ！今日は6時まででいいって、チーフも言つてたし」「え～、まだ3時なのにですか～？まだ3時間もここにいろつて事～・・・つてか、バレンタインまでまだ2週間もあるのに、売れるわけないですよ～」

「売れないと思つけど、他の店が売り始めてる以上、やらない訳にはいかないんでしょ。そのお陰で雇つてもらつてんだから、文句言えないじゃない」

「せりや～そ～ですけど～・・・外でやる必要は全くないですよね

」

それにはあたしも同感だった。

ただでさえ風の強い海沿いのこの街で、真冬に外でチョココレートを売るなんて狂気の沙汰だ。

激安家電店にいるネット回線会社のキャッチ部隊のような、ペラペラのウインドブレーカーが制服として配給されているが、この強風の中ではあまり意味をなしていない。

道行く客も、ワゴンの中をチラリと一瞥するだけで、さつさと歩き去っていく。

何時間もここに立っているのに、あたしから買つてくれた男性はまだ一人しかいなかつた。

思い出すのも困難な冴えない風貌の中年男だったが、あたしがあまりにしつこく押し付けたものだから、同情で買つてくれたようなものだ。

あたし達は、あたかも『マッチ売りの少女』のよう、「チョコはいいませんか～」とか細い声で叫び続けた。

長い間、一人暮らしだつたあたしが、この街に戻ってきたのには、

ちょっとした理由があった。

収入が無くなつて生活できなくなつたのは勿論なのだが、クリスマスに起こつた不思議な体験が、あたしをこの街に留まらせていた。

クリスマスイブの夜、コタツの中で酒を飲んで酔つ払つていたあたしは、突然、10年前に別れた（厳密に言えばあたしが捨てた）元カレ、井沢孝之に電話する事を思いついた。

10年も前のケータイ番号がまさか繋がるとは思つていなかつたのだが、何と孝之は電話に出た。

その時、家に誰もいなかつたのをいいことに、あたしは彼を呼び出し、話をして、そして10年ぶりに体を重ねた。

問題はその後だつた。

彼に再び逢おうと日論んで出かけた同窓会で、孝之は3年前に交通事故で死んでいる事を聞かされたのだ。

悲しむどころではなかつた。

驚きのあまり、あたしは只々、呆然としていた。

あれは幽霊だつたのか。

もしくは、酔つ払つたあたしが見ていた夢だつたのか・・・。

でも、あたしは確かに彼とやる事はやつた。

彼の滑らかな筋肉質の肌の感触まで、まだはつきりと思い出せる。真相は分からぬまま、あたしは何度も彼に再会しようとケータイに電話をしてみた。

だが、一度は繋がつた筈のケータイからは、「お掛けになつた電話番号は現在使われておりません」という、お馴染みのアナウンスが流れるのみだつた。

それから、彼の事が気になつて、あたしは仕事が決まるまでは、彼が生きていたこの街に留まる決意をした。

何故つて・・・。

あたしは気付いてしまったのだ。
彼と別れて後悔していた事を・・・。

天然の茶髪に色素の薄い琥珀色の瞳。

陸上部で鍛えた長い筋肉質の手足。

スラリとした長身は完全にモデル体型で、遠くからでも人目を引いた。

そんなイケメンをあたしは10年前、つまり25才に時にフツてしまつたのだ。

彼はチャライ外見に似合わず、真面目で几帳面で、しかも口が悪くて、乱暴で、融通が利かなかつた。

昭和のオヤジかというくらい、頑固一徹、そして、優しい人だつたのだ。

そして、あたしは彼に反して、いい加減で移り氣で、所謂、八方美人な人間だつた。

今、思えば、相反するあたし達だから、お互い好きになつたのかも知れない。

人は自分にないものを見るのだから。

でも、一途な彼は、時にあたしを束縛した。

まだ、若さを持て余していたあたしは、彼とこの街で一生を終える事は考えられなくつて、彼が結婚を口にし出した時、別れを告げたのだ。

結婚つてホントにタイミングの問題なんだと思つ。

今、35歳で切羽詰つてあたしなら、二つ返事でOKしただらうに。

今更、後悔しても遅過ぎる。

何と言つても、彼は3年前にもう死んでいるのだ。

あのクリスマスイブの不思議体験は、神様がくれたトキメキのプレゼントだったんだろう。

でなければ、実はあたしを恨んでる孝之の幽霊だ。

どちらでもいい。

あたしはもう少しの間、彼との思い出が残るこの街に留まりたかった。

「ねえ、松本さん、幽霊って信じます〜！？」

ほんやりと孝之の事を回想していたあたしは、突然、タイムリーな質問をされて飛び上がった。

まさか、あたしが靈の事を考えていたとは思わない裕香ちゃんが、ワゴンの反対側から手に息をハーハー掛けながらこっちを見ている。「な、なんで！？へんな事言わないでよ。気持ち悪いじゃん」「でしょー！？でも、この百貨店の裏に商店街のアーケードがあるじゃないですか）。そこに怪しげなカフェができるんですよ。占いカフェって言って、死んだ人ともお話をさせてくれるんだって。メチャ、胡散臭くないですか～？」

・・・胡散臭い。

でも、その時、藁をも掴む心境だったあたしの胸はドキン！と鳴つたのだ。

女ってホントにバカだと思ひ。

占いとか、おまじないとか、幽霊とか、科学的根拠がないものに何故、惹かれてしまうのだろう。

最近流行らしい天然石の数珠を何重にも腕に巻きつけてる女性客。朝「今日の占い」をテレビで見て、「最下位は乙女座のアナタ」と言われてマジくこんでるあたしの母親。かく言うあたしも「今日のラッキーアイテムはピンク!」と聞いたら、ピンクのハンカチを持つていつてしまう。

幽靈もまたしかしり。

イケメンだったにも拘らず、一途過ぎる性格がウザイと思っていた孝之が、死んだ途端に美しい思い出になる。

幽靈になつたと思った途端に、神聖視してしまつのだらうか。

実を言えば、孝之に再会する為、恐山まで行つてイタコに降靈してもらひう事まで考えていたのだ。

それが、ここから500m離れたアーケード内の占いカフェで、コーヒー飲みながら、靈と話せる。

サファリパークじゃないんだから、あちこちに靈がウロウロしている訳ではないだろうが、青森県まで行く手間暇を考えたら、ずっと効率的だ。

嘘だつたとしても、コーヒー飲んで帰つてくれればいいんだから、スタバに行くよりは有意義だらう。

行つても損はなさそうだ。

そう考へて、あたしはバイトが終わったその夜、裕香ちゃんと占い
カフェ「ロザリオ」のドアを叩いたのだ。

占いカフェ「ロザリオ」と書かれたアンティークな雰囲気の木製の
看板が、同じく重厚な木製のドアに掛かつたまま、風に煽られ、ガ
ツタン、ガツタン音を立てている。

外壁だけ、と言うより見える部分だけレンガが張つてある壁にはワ
ザとらしく薦が絡まつていて、年季が入つていて、年季が入つていて、
年季が入つていて、年季が入つていて、年季が入つていて、年季が入つて
いる。

最近、オープンしたばかりなのに、薦が絡まるとは、自作自演も甚
だしい。

しかも、アンティークなのはその店だけで、右隣は自転車屋、左隣
は乾物屋という昭和の趣だ。

あたし達は並んで、アンバランスな和洋折衷の雰囲気のドアを開け
た。

中は薄暗くて、光源が全く入らないように、にカーテンが引かれて
いる。

オルゴールミュージックが静かに鳴つていて、キャンドルライトに
ボンヤリと照らされた店内は幻想的な雰囲気だ。

壁に建て付けられた棚の上には、かわいいコーヒー カップや、ガラスのグラスがズラリと並んで、耐震対策は全く考えられていない。

入り口付近に丸テーブルが一つ、そして半円形のカウンターが中央にドンとあって、その周りを囲むように椅子が並んでいる。

その構造から、この店の前はスナックだった事が窺える。

カウンターの中央には、一人の男性が立っていた。

少女マンガでよく見る執事のような服装に、髪をオールバックにしている。

シャープな輪郭に東洋的な切れ長の目。

間違いなく、執事をイメージしたコスプレだ。

イケメンの部類に入ることは間違いない、イタゴさんよりは目の保養になるかもしれない。

「お帰りなさいませ、お嬢様方」

執事はニッコリ笑つてそう言つと優雅な仕草で、カウンターの前に並んだ椅子に手を差し出した。
ここに座れという事らしい。

「やつだあ！こいつて執事カフェでしたつけ？お嬢様つて、なんかウケルんですけど～」

さすが女子大生。

若さの力で順応してしまった裕香ちゃんが、キャピキャピしながらあたしを残して椅子に座つた。
あたしも慌ててその後を追い、彼女の隣に腰掛けた。

「執事もしますが、勿論、占いもできますよ。いつでもお問い合わせ下さい」としてます。お飲み物は何になさいますか？」

そつがない笑顔で、彼は笑うと差別しないように、あたしにも問い合わせてくれた。

少し高めの良くなれる声。

その声と凛とした清楚な佇まいに、教会の牧師さんみたいな印象を受ける。

「あ、じゃあ、カフェオレをお願いします。」

「えー！松本さん、飲みましょうよ。ねえ、ここ、アルコールもあるんでしょ？」

「いざりますよ。お車でなければ

・・・車で来てるし。

そう思つたけど、このお気楽大学生は帰りの事など考えてもないようだ。

大方、あたしに送らせるつもりなんだろうけど。

結局、あたしにはカフェオレ、裕香ちゃんにはカクテルを執事は用意した。

「今日は占いを御所望ですか、お嬢様方？」

コーヒーを口にしながら、まだ店内をキョロキョロしているあたし達に執事は声を掛ける。

そうだ、本命はそれだった。

イケメンを至近距離で見ただけでも今日の収穫は大きかつたけど、あくまで目的は孝之だ。

あたしがオズオズと口を開いたとしたその時、横から裕香ちゃんが

先に口を挟んだ。

「あたし〜、彼氏欲しいんですけど〜、どうやつたらできますかあ
〜？」

・・・んな事、自分で考えらつつーの一

思わず出そうになつたツツコミを、あたしは必死で胸に収める。
彼女だけ、それなりに必死なことには違ひない。
あたしより、時間的に余裕があるだけで。

執事はニッコリと笑いながら、ボードの上に置いてあるソフトボーリくらいの水晶玉をカウンターに持ってきた。
小さな赤い座布団の上に載つた透明無地の球はあたしが顔を寄せる
と微妙に色を変える。

神秘アイテムナンバーワンだ。

彼は白い長い指で水晶球の周りにクルクル円を描いた。
そして、裕香ちゃんの顔とその反射した影の歪み具合を見比べて、
「今年、運命の出会いがあります」と自信有り気に答えた。

「え〜！つそれって、もしかして、店長さんの事じゃないですか〜！？今日つて運命の日〜！？店長さんつておいくつ〜？」
「あなたより年上なのは確かですね。僕はもう若くないですよ、お嬢様。」

彼は軽く裕香ちゃんをあしらひ、あたしに向かつてワインクした。

・・・そのワインク、どういう意味だ！？
あたしと同類なのをアピールしたいのか！？

複雑な気分で、あたしはカフェオレを啜る。

彼はあたしをしばらく眺めていた。

イケメンの悩ましげな視線が痛くて、あたしは思わず赤面して上目遣いに彼を睨む。

「・・・なんですか？あたしの顔に何かついてます？」

「・・・はい、あなたには靈がついてますよ。それもかなり強い、

ね

「・・・え！？」

あたしを見つめていたと思つていた執事の視線は、あたしを通り越して何もない壁を睨んでいる。

あたかも、あたしの後ろに誰かがいるように。

あたしは、見えないものを見ている執事の視線の先を、恐る恐る振り返った。

「やつだああ！何ソレ！？松本さん、憑り付かれてるんですかあ？」

カクテルを吹き出しながら、「冗談かと思つた裕香ちゃんが茶化して叫んだ。

あたしも思わず、後ろを振り返つてキヨロキヨロ見回す。
勿論、そこにいるのは孝之じやないのかつて思つたからだ。

執事はジッと何も無い壁を睨んで続けた。

「その靈はあなたに強い恨みを持つています。男性です。かなり強い靈力だ・・・このままでは、あなたに靈障が起る・・・あなた、早くこの土地を離れた方がいいですよ・・・」

「ええ～！あたし、失業して年末にこっちに来たばかりなんですけど！？」

「そんな事より、命が大事でしょ？できるだけ早く引っ越すべきです・・・一度、御祓いした方がいいかもしませんね。今、ここで予約されれば20%オフになりますが・・・」

「はー？20%オフって、御祓いの代金！？」

「勿論、こちらも商売ですから。御祓いの通常価格3万円ですが、今回は初回キャンペーンも同時に使えます。最大30%オフ！これはお得ですよ。」

「松本さんーやつたほつがいいですよー！男運悪いのも直るかも～」

ふざけんなーと言いかけた所に、裕香ちゃんまでが合いの手を入れ

る。

キレたあたしはカバンを掴んで立ち上がった。

「結構です！そんなのインチキに決まってるじゃない。靈感商法もいいとこだわ！もう帰ります！お勘定は！？」

「はい、カフェオレ800円になります。」

カフェオレが800円！？

ラーメン食べた方がマシじゃん！？

にこやかに返事をする執事に、あたしは更に囁み付いた。

「ちょっと！なんでカフェオレが800円なの！？スタバより高いじゃん！ってか、ラーメン食べれるし…」

「テーブルチャージが含まれておりますので、若干高めの設定になつております。靈視の料金は今回はサービスさせて頂いてありますよ。」

「何が靈視よ！信じられない！もうここわよ…釣りはいらないから！」

あたしは1000円札をバン！とカウンターの上に置いて、荒々しく店を出た。

憤慨しながら家に辿り着いたあたしは、まずはお清めとばかりにバスルームに直行した。

シャワーの蛇口を捻つて、お湯を頭から滝のように浴びる。修行僧の如く、あたしはしばしシャワーに打たれていた。

ムカツク！
ムカツクつたらムカツク！

どーしてあたしが孝之に恨まれなきゃなんないのよ。
そりや、付き合ってた時はないがしろにしてきたし、あまり近くす
タイプの彼女じゃなかつたかもしない。

でも、高校の時から付き合い始めて、別れるまで8年も一緒にいた
んだもん。

付き合い長すぎて、夫婦のような馴れ合いの関係だったから、遠慮
なく好きな事言つてたかもしない。

結局、長過ぎた春が倦怠期と重なつて、刺激が欲しくなつたあたし
が別れを切り出したんだけど。

孝之はもしかして、死んでも死に切れない程、あたしの事恨んでた
のかなあ・・・。

だったら、あのクリスマスイブの事はやっぱりあたしの夢だつたん
だろうか。

熱いシャワーを浴びながら、あたしの田から涙がポロポロ零れてき
た。

さつきのイケメン占い師は、あたしからふんだくる為に、見えても
ないクセにテキトーな事を言つたかもしない。

でも、心当たりがあるあたしには、その言葉が重く圧し掛かってき
た。

・・・また、会いたい。

本当は怒つてるの?つて、聞いてみたい。

もし恨んでるなら、一言、ゴメンネって言いたい。

そうでなければ、あたしだつて死んでも死に切れない。

そう思つたあたしは、タオルを掴んで、バスルームから飛び出した。

「えーっと、ビールと安物のワインと、確かスルメイカがあつたっけ・・・。そして、コタツの上には蜜柑・・・と。」

自分の部屋に戻つたあたしは、記憶の糸を手繰り寄せながら、あのクリスマスイブの夜を再現しようと試みていた。

そう、確かに、テレビを一人で見ながら、ビール飲んで酔つ払つてて・・・。

その後、ケータイから電話したんだっけ。

テレビをつけて、スルメイカを齧りながら、あたしは缶ビールを開けて一気に飲み干した。

酔い加減はこのくらいだつたかな・・・？

いや、あの時はもつと飲んでたかも。

そもそもが酔つていたので、当時の記憶は更に曖昧なものになつていた。

記憶を手繰りながら、あたしは景気付けに更にビールを開ける。そして3本くらい飲み干した後、ようやく眩暈を感じたあたしは、コタツに入つたままゴロンと仰向けになつた。

そうだ、ケータイ、ケータイ・・・。

お願い、電話に出て、孝之・・・。

あたしは酔いで震える手にケータイを握つて、アドレスをスクロー

ルした。

まだ消えていない井沢孝之の名前。
ドキドキしながら、あたしが発信ボタンを押そうとしたその時。

パン！

大きな破裂音がして、突然、部屋の電気が消えた。

一瞬にして暗闇となつたあたしの目の前で、ケータイ画面だけが光源になつて、何とか周りが見える状態だ。

さつきまで付けていたテレビも同時に消えてしまったので、部屋は静寂に包まれる。

ブレーカーが落ちたんだろうか・・・？

あたしが酔いの回った体を起こそうとしたその時、体の動きが突然奪われた。

何かに押さえつけられているような、体の上にモノが載っているような、すごい重圧感だ。

あたしは仰向けのまま床にべたつと押し付けられた。

こ、これって・・・噂の金縛り・・・？

動かない体の中で唯一動いた目をキョロキョロさせて、あたしは部屋を見回す。

誰もない筈の小さなあたしの部屋。

部屋の隅に置いてあるシングルベッドの上に、あたしは信じられないものを見た。

両足を抱えて座っている人があたしを睨んでいる。

暗い影のようなその人は、シエルエットから男性である事が分かつた。あたしと視線が合うと、その影はゆっくり立ち上がり、こちらにスー
ーっと向かってくる。

歩いている感じはない。

足にローラースケートがついているように、ブレる事なく影は真つ直ぐあたしの方に近付いてきた。

・・・だ、誰！？孝之なの！？孝之！？

影はあたしの体の上までスーっと載つてくると、首に手をかけた。覆い被さつてくるその影の顔を、あたしは硬直したまま凝視するが、誰かといつ判別ができない。

怖いのに視線を逸らすことも適わなかつた。

「・・・・・」

首に掛かる手があたしの首をグッと締め付け、あたしは息を呑む。

恐怖と酸欠で抵抗する事ができない。

目の前がゆつくつと暗くなつていつて、あたしは、そのまま意識を手放した。

「松本さん、ひどいですよ。昨日、あたし、飲んじゃつたから一人でタクシーで帰ったんですよ。もひ、何で急に帰っちゃつたんですか？」

一日酔いの頭に、ノリノリ女子大生の甘つたるい声は脳味噌をえぐられるようだ。

蛍光ピンクのウインドブレーカーに身を包んだあたしは、古賀店の前のワゴンの前で道行く人々をボンヤリ眺めていた。

昨夜の恐怖の心霊体験のせいで、仕事するという心境では全くなかつたが、バレンタインまで後2週間を切つている。

今日休んだら、会社もバイトを補充するのが大変だろう。

そう思つて、悪夢の一夜が明けてから、あたしは取り合えず外傷がない事を確認した。

一日酔いの体に「ウゴンの力」を注入して、何とかバイトに来たのだ。

社会人生活が長いと、会社の都合まで考えてしまつ、我ながら殊勝な心意氣だ。

それに免じて正規採用してくれれば、もつといいのだけど。

「当り前でしょ！？あの店、絶対怪しいし。なんだかんだ言って、御祓い代やら、壺やら、数珠やら、売りつける気なのよ。大体、何であたしが靈の恨みを買わなきやなんない訳？」

ワゴンを挟んだ反対側にいる裕香ちゃんに、あたしは反撃する。

そうだ、靈（しかも男の！）に恨みを買う覚えなどない。

あるとすれば、生前、邪険に扱ってきた孝之くらいだけど、昨夜のあの影が孝之だったのかどうかは確信がなかつた。

・・・孝之とこ「りは、そつ・・・。

もつと暗くて地味な感じの、執念深い人・・・。

そこまで考えて、あたしは金縛りや首を絞められた感触を思い出してゾッと鳥肌が立つた。

「でもお、あのイケメン占い師の人、靈が見えるんですって。それに、松本さんが男の人に恨みを買つて、あたしは分かる氣するなあ」

ニヤニヤしながら、裕香ちゃんは聞き捨てならない事をのたまつ。あたしは田を剥いて、ワゴンの後ろの彼女を睨みつけた。

「それ、ビーゆー意味よ！？何で、あたしが男の恨み買つの！？」
「だってえ、松本さん、天然じゃないですか。結構かわいいのに、鈍いつていうか。思わせ振りな態度をしどいてから、そんな気ありませんでした、みたいな？勘違いさせひやつ罪な女つて感じですかね」

「いつ、あたしが思わせ振りな態度したのよ？」

「だから、松本さんは無意識にそういうのやつちやつんですよ。だから、男は勝手に勘違いして、自滅するんですね。」

あたしは、考え込んでしまった。

自分が八方美人でいい加減な性格なのは自覚していたので、裕香ちゃんの言葉にも思い当たるフシがない事もない。

ただ、生きてる男ならともかく、靈に恨みを買つほどではないと思う。

「でもお、これっていう意味ですよ。松本さんの近くって、なん

か暖かくて、明るい感じがするんですよね~。非モテ男は、明かりに群がる蛾みたいに吸い寄せられちゃうんじゃないのかな~」

取り繕うつもりなのか、裕香ちゃんは褒めてるのか、貶してるのか微妙な「メントをする。

その気持ちはあるがたいけど、生憎、非モテ男もモテ男も、あたしの周りには飛んで来る気配がない。

・・・もう一度、あの店に行つてみよ~。

インチキ占い師を信じていた訳では全くない。

でも、昨夜の不思議体験を誰かに聞いて欲しくて、あたしは唐突にそう思った。

恨みどころか殺意まで感じた昨日のあの影。

あれは孝之じゃないって、誰かに言つて貰いたかったのだ。

『占いカフェ ロザリオ』は昨日と同じように、自転車屋と乾物屋に挟まれてアンバランスなアンティークな雰囲気を醸し出していた。今日は裕香ちゃんは合コンだとかで、バイトが終わるとじゅうせと帰つてしまつたものだから、あたしは一人で店の前に立ちつくしていった。

月が出ているせいで、店の前はボンヤリと明るく、開店したばかりなのに古びた看板がはつきり見える。

その扉を見つめて、入ろうか、入らまいか、しばらく考えていた矢先、突然、中から扉がバーンと開いた。

「キャー！」めんなさい…

3人の制服姿の女子高生がキャピキャピ騒ぎながら、外に飛び出してきて、あたしは思わず後ずさる。

何の悩みもなさそくなテンショソの顔だつたけど、ここに来たという事は何か悩みがあるんだろう。

そうでなければ怖いもの見たさか、イケメン執事を観賞しに来たか。

あたしは、もう中に客がないのを確認してから、恐る恐る足を踏み入れた。

「お帰りなさいませ、お嬢様。」

店内の正面に設置されたカウンターの中で、昨日の執事はにこやかに声を掛けた。

昨日と同じオールバックにした艶のある黒髪に切れ長の目。自分がイケてるのを自覚した上で、なんかの少女漫画に出てくる執事の「コスプレ」している。よほどのナルシストか、そうでなければ、かなり残念なマンガオタクだ。

あたしは警戒しながら、そろりとカウンターの椅子にお尻を載せた。カフエオレ800円は仕方ないにしても、御祓いをこの「コスプレ」執事にお願いする気はなかった。

たとえ、それが最大30%オフで、21000円に値下がりしても、だ。そもそも、孝之に会いに来たのだから、祓われては本末転倒というものだらう。

追い詰められた小動物みたいに固くなっているあたしを、執事は苦

笑して見つめた。

「そんなに怖がらなくとも、僕は押し売りはしませんよ。昨日言つた事、もし、気にしてらつしゃつたら、申し訳ございません。ただ、僕は本当に見えてしまう体質なんです。」

「・・・本当なのは分かつてます。あたし、昨日、靈に襲われたんです。金縛りにもあつて・・・」

ああ・・・と何故か納得した顔で、執事は切れ長の目を細めた。

「では、あなたはまだ気が付いてなかつたんですね。これは失礼しました。」

「・・・? 何をですか?」

カウンターに頬杖ついているあたしの顔を見て、彼はにこやかに恐ろしい事を言った。

「あなたも僕と同じ、『見える』体質なんですよ。」

あたしに靈が見える！？

いや、見えてないけど。

そんなの今まで見た事ない。

見えるどころか、子供の頃、お盆にやつてた「あなたの知らない世界」特集を見て、震え上がってた側の人間だ。

見たとすれば、クリスマスイブに現われた孝之くらいだけど、あれは幽靈というには微妙な感じだ。

寧ろ、見えないから、こんなとこまで800円のカフェオレ飲む覚悟で来たんじゃない。

何を言われているのか分からず、あたしは眉間に皺寄せて執事を見た。

あたしの反応を見て、彼は可笑しそうに笑う。

「あなたはにきつと人間か幽靈かの判別つかない位にハツキリ見えているんですよ。今まで会った人の中には、本物の靈もいたはずです。靈だと気が付かなかつただけで。会つた人が実は亡くなつてたなんて体験、今までありませんでしたか？」

「・・・あ、ある・・・かも」

それは、ある。

会つたどころかエッチました、3年前から死んでる孝之の顔がすぐ頭に浮かんで、執事の言葉の意味をあたしはやつと理解した。

リアル過ぎたあのクリスマスイブの夜。

電話で呼び出し、ハツチまでした孝之がまさか死んでるなんて夢にも思わなかつた。

いや、寧ろ、夢だつたんだと思つていた。

執事の言つ事が本当なら、やつぱり孝之はリアルな幽靈だつたのか・・・。

人間×幽靈の奇跡の異種交配は、靈感の強いあたしだから実現したケースなんだろうか？

「でも、昨日のあの心靈体験は！？アレ、完全に悪靈入つてたし！あたし、生まれて初めて金縛りとか体験しちやつたんですけど」「それは、その靈があなたより強くて、意図的に攻撃してきたんでしょう。惡意のない浮幽靈は素通りしていくますからね。その場合、普通の人には見えない靈が、あなたにはハツキリ見え過ぎて、人が靈か区別がつかないんですよ。」

「・・・はあ。じゃ、昨日のはやつぱり、あたしを恨んでる孝之だつたつて事？」

「違うと思います。孝之さんが誰かは知りませんが、その靈は今、ここにいますから」

その言葉に、あたしはギョッとして執事の視線の先を見た。

鷹揚な口調とは裏腹に、カウンター越しに立つてゐる執事の表情は険しくなつていた。

筆で描いた様な眉の下の細められていた切れ長の目が鋭くなり、形のいい薄い唇がギュッと噛み締められる。

彼が見据えるその方向から、冷凍庫を開いた時のような冷氣がスーっと漂つてくるのを肌で感じた。

尋常でない執事の形相と得体の知れない冷氣に、あたしの背中がゾッと寒くなる。

「な、何ですか？執事さん、何、見てんのよ？」

「・・・昨日からあなたに憑いている靈ですよ。今、そこにはいます。昨日は大人しくしてくれましたが、今日はそういう訳にもいかないみたいですよ。あなた、なんか男を泣かす事しました？」

「しつ失礼ね！人聞き悪い事言わないで下さい！泣かすどころか、最近、男の子と話なんてした事ありません。ナンパもされてません！」

「でも、あなたに弄ばれたって言つてますよ？」

「ブツ！な、何ですか、それ！？そんな事できたのは20代までです！30代になってからは、声も掛けてもらえません！」

あたし達が掛け合い漫才をしている間に、執事の視線の先の壁からうつすらと白い靄のようなものが湧き上がってきた。
靄は次第に濃くなり、煙のように立ち昇りながら、自らを形作っていく。

あたしは驚異の現象に口をあんぐり開けて、硬直していた。
やがて、白い煙は天井に向かつて巻き上がると、そこには立ちぬくす一人の男性の姿が現われた。

小柄で小太りな眼鏡をかけた30代くらいの男だ。

「けいおん！」と書かれた萌え系アニメがプリントされているダサダサトレーナーは、ジーパンの中に入つてベルトで締められている。背中には何故かリュックを背負つていて、ウルトラマンのフィギアのストラップがジャラジャラぶら下っている。

髪はかなり後退しており、禿げ上がった額と背中に伸ばした長髪のせいで、まるで平家の落ち武者だ。

アキバとか大須とかの電気街に必ずいるこのタイプの男性。
あたしの友達には絶対にいないと断言できる。

でも、どこかで見たような・・・？

硬直している脳味噌をフル回転させて、あたしは必死に思い出そうと試みた。

その時、男の靈は俯いていた顔をゆっくりと上げた。

あたしを真っ直ぐに見つめる眼鏡の奥の瞳がギラリと光って、ポテつとした丸い顔が歪んでニヤリと笑った。

途端に、笑った唇の端からボタボタッと血が滴る。

「ひ、ひええええーーーー！」

あたしは恐ろしさのあまり、悲鳴を上げながらカウンターの上によじ登つて、執事が立っている内側に飛び込んだ。

「執事さんーーあ、あんな人、知り合いにいませんけどーー? 誰なの? ってか、何、あの無駄にリアルなオタクスタイル!」

執事にしがみ付きながら、あたしはパニックになつてキンキン声で叫んだ。

「僕が知る筈ないでしょう。でも、彼はあなたを知っていますよ。弄ばれたつて怒りますからね。」

執事は目の前で起つた超現象に驚いた様子もなく、淡々と話をする。一応、拌み屋やってるんだから、こんなのが見ると慣れているんだろうか。

靈とは思えないリアルな動きで、オタク男はゆっくりと歩いてカウンターの方に近付いて来る。

足は両方ついてて左右交互に動かしているが、足音は昨日と同じく

全くしない。

唇から滴る血だけがリアリティを持つて、歩く度にポタツポタツと滴り落ちた。

「し、執事さん！御祓いお願ひします！通常料金3万円から30%オフで！支払いはバイトの給料日の25日でいいですか！？もしくは失業保険の下りる来月15日で！？とか、早く何とかしてください！！！」

パニックになつたあたしは支離滅裂な事を喚きながら、執事に抱きついてガクガクと揺さぶつた。

なのに、彼は前を見つめたまま返事もしない。

「ちよつとー？執事さん、聞いてんのー？ねえつてば・・・・・？」

彼は返事をすることなく、揺さぶるあたしの力に押されるようにぐらっと傾き、カウンターの下に崩れ落ちた。

「あやあああーちよつとおーどーしちゃったのー？？」

びつくりしたあたしは、ぐつたりと蹲るような姿勢で倒れている執事の背中に追い縋つた。

その時を待つていたかのように、彼の両手があたしの両足をグッと掴んだ。

その勢いであたしはひつくり返され、カウンターの下で尻餅をつく。

「キヤー！な、執事さん・・・・！」

そこまで言いかけて、あたしは息を呑んで手で口を押さえた。

蹲つてあたしの両足首を掴んだ執事の顔がゆっくりと上がる。切れ長の目が大きく見開かれ、その唇から血がボタボタ滴り落ちる。

「オ・レ・ヲ・モ・テ・ア・ソ・ビ・ヤ・ガ・ツテ・・・」

さつきまでの執事のテノールとは全く別人の声が、その唇から発せられた。

「オ・マ・エ・ヲ・ユ・ル・サ・ナ・イ・・・」

イケメン執事の美しい顔は恨みに歪んで、形のいい薄い唇の間から血がボタボタ滴つてくる。

その形相は正にステレオタイプのバンパイアだ。今時、こんな流行らないよつて位に、彼はモンスターと化している。

あたしはその時やつと、彼の豹変振りの訳を理解した。さつきまでこつちに向かつて来てたアキバ男の靈は、今、執事さんの体に憑依して彼を動かしてるんだ。

人から3万も御祓い代巻き上げようとしてたクセに、自分が憑りつかれてるとは、どんな拝み屋だ。

全然、ダメじやん！

お金払つてないのがせめてもの救いだ。

恐怖で完全にパニクつたあたしは、ぎやあぎやあ悲鳴を上げながら、掴まれていた足を夢中で振り上げ、イケメンの顔目掛けて踵落としを喰らわせた。

バカン！と小気味良い音がして、彼はよろけながら顔を両手で覆うと、一瞬、あたしから体を離した。

その隙をついて、あたしはカウンターによじ登つて飛び越え、店の出口に向かつてダーツと全力疾走する。

あたしに蹴られた顔を抑えながら、執事はヨロリとカウンターの中で立ち上ると、ゆっくりとそれによじ登り、落下するよつに何とか飛び越えた。

体が馴染んでないのか、全ての動きが不自然だ。

ズルツズルツと両足を引き摺るように、彼はゆっくりとこちらに向かって来る。

血に染まつた真つ赤な口が大きく開かれ、地獄の底から響いてくるかのような呻き声が発せられる。

その形相はもはや執事でさえない。

バンパイアも通り越して、ジョーズの域までいつちゃつてる。

半狂乱になりながら、あたしはアンティークな木造の扉を開けようと、取っ手をガタガタ引っ張った。

が、鍵は開いているのに、扉はビクともしない。

うわああ、オカルト映画でよくある展開だ。

貧困な発想力だが、お約束の行動をしているあたしも、映画みたいに殺されちゃうんだろうか？

あたしの脳裏に浮かぶのは、昔見た映画『バタリアン』。

お願い！

誰か、助けて！

孝之！

「孝之！」

唐突に頭に浮かんだ孝之の名前を、あたしは思わず口走っていた。無駄な足掻きと知りながらも、あたしはダウンジャケットのポケットに入れつ放しだったケータイを引っ張りだす。

何度も彼と話そうとチャレンジしてたお陰で、リダイヤルボタン一つで彼のケータイに発信できた。

お願い！お願い、出て！孝之！

目をギョッと瞑つてあたしはケータイを握り締めて、ひたすら祈つた。

ルルル・・・ルルル・・・ルルル・・・

・・・あれ！？

いつものソフトバンクのアナウンスではなく、聞き慣れたコール音が聞こえてきて、あたしはギョottiした。

もしかして繋がる！？

「あなたの知らない世界」にいる幽霊、孝之に！？

この状況を何とかしてくれるなら、もうこの際どこの誰でもいい。そう思った時、ケータイから聞き覚えのある懐かしい低い声・・・！

「もしもし？井沢ですが？」

「たつ、たつ、たつ、孝之！？孝之なの！？」

キタ――――――――！

なんとか知らないけど、孝之テタ――――――！

氣だるそうな彼の声を聞いて、あたしは安堵でブワッと涙が出てきた。

あたしの置かれた状況を知らない彼は、面倒臭そうに返事をする。

「・・・あんだけ。誰か知らずにかけたのかよ？相変りずテキト
なヤツだな。」

「そつ、それビジョンないんだって！あたし、殺されそつの！お
願い、助けに来て！」

「あ？何だよ、それ？お前、ビジョンてるの？」

「駅前の百貨店の裏にあるアーケード街…占い喫茶口ザザリオつてお店！ねえ、早く来て！今すぐ来て！」

「早くつたつて、俺、今、起きたばかりだし……」

「な、何言つてんのよ！死んでるクセして！おシャレなんて生前からしてなかつたじやん！いつも同じ服着てたのに今更何言つてんのよ！そのまままでいいから早く来て！」

「・・・死んでて悪かったな。お前ね、それが人にモノ頼む態度？」

あたしの暴言に、電話の向こうの彼はムツとした様子で反撃してきた。

うああ！もおおお！

死んでからも融通が利かない孝之に、あたしはせりぱりライライワさせられる。

そう言えど、生きてる時も、くだらない事でこんな風に言い争つていたんだつけ……。
だからイケメンでも、ウザくなつて別れたのを思いだした。
でも・・・今は・・・！

血を吐きながらズルズルと音を立てて、執事はどんどんあたしに近付いてくる。

憎悪に染まつた真つ赤な瞳があたしを捕らえた。
途端に、体の自由が利かなくなつて、あたしはケータイを握り締めたまま硬直する。
昨日と同じ金縛りの感覚だ。

「おい、恵理つペ？何とか言えよ。『めんなさい孝之様つて言つたら許してやる』

「子供か！？そつ、それど二じやないんだつて！…孝之！助けて！…！」

「分かつたよ、うるせえな。今行くから、待つてろ」

「も、もう待てないんだって…早く！」

執事は田の前まで来ると、硬直しているあたしを頭からつま先まで舐めるように視線を絡ませ、ニヤリと笑った。
バンパイアスタイルもイケメンがやると、それなりにかつこいいんだから不思議なものだ。

動けないあたしの首に、彼の白い指がかかつて爪が肌を引っ掻いた。その爪の先が皮膚を突き破りうとしたその時。

パン！！

大きな破裂音が部屋全体に響き渡った。
飾り棚に並べられていたコーヒーカップが一瞬にしてパパパパン！
と割れ、破片が部屋中に飛び散る。

あたしの首に手をかけていた執事の顔が驚愕で引き攣った。
その途端に、彼の体は前から大きな力で突き飛ばされたようにドーンと吹っ飛ばされて、カウンターに音を立てて激突した。

自由になつたあたしはその場にヘニャヘニャとへたり込み、ゲホゲホとむせ返る。

「来てやつたぞ。ありがたく思え。・・・つてか、アレ、誰！？」

懐かしい低い声が、あたしの頭の上から響いてきた。

声の方向を見上げたあたしの横に立ちはだかるその姿。

ジーンズを履いた長い足、黒いパーカーとハイネックのシャツ、長めの茶髪。

ああ、やつぱりいつもと同じ服着てる。

それでも、あたしは嬉しかった。

死んでる筈の孝之が、今、あたしの横に立ってるやの事実…

「おい、恵理つぺー何だよ、あの人? 何でお前のこと恨んでんの?..」

へたり込んでるあたしを見下ろして、孝之は怒鳴つた。

血色の悪い白い顔に、琥珀色の瞳と色素の薄い茶髪が妙に似合つて
いる。

間違いなく孝之だ。

イケメンでも融通が利かなくて、理屈っぽくて、一途だつた孝之!..

死んでる筈なのに、すごい生氣を感じるのは氣のせいか!?

「あ、分かんないの。なんか、あたし、逆恨みされてるみたいで。
あたしに弄ばれたつて言つてるらしいんだけど・・・でも、孝之、
あんただつて・・・」

・・・死んでるんじゃないの!?

といつ疑問は取り合えず、口に収めた。

要らん事言つて、帰つてしまつたら元も子もない。

帰るにしても、あのモンスターと化した執事さんだけはどうにかしてもらわなければ!

「弄ばれたあ？お前、また何の気なしに男に気を持たせる事したんじゃないの！？気のあるフリして近付いてから、実はそんな気ありませんでした、みたいな？」

意地悪そつこ横田であたしに視線を落としながら、孝之は鼻で晒つた。

奇しくも、今日裕香ちやんに言われたのと全く同じ言葉が孝之の口から出て、あたしはぐっと返事に詰めた。

「・・・なんで、そう思つのよ？」

「なんで？よく言つよ。俺も最初はそれで引つ掛けられたじゃん。・・・つてか、今はそれどこじゃねえだろ！」「

孝之の怒鳴り声にあたしもハッとして前方を見た。

孝之が降臨した時のショックで、吹き飛ばされてカウンターに激突した執事さんは、頭を振りながらヨロヨロと起き上がった。カウンターにもたれるように何とか立ち上ると、再び、あたしの方に向かってズルズルと足を進めた。

その歩みは、ゆっくりではあるけど、ダメージを受けたようには見えない。

ゾンビのようなしぶとせいで、あたしはゾクッと寒気がして、思わず孝之の足にしがみ付く。

「ひつひえええー！つち来るよーどーしょ、孝之ー？」

「あの人の中に、なんか入つてるだろ？まず、それを出さないと・・・。お前、ちょっと蹴り入れてこいよ」

「や、やだよ！それができるくらになら、最初からあんたなんか呼ばないつて！」

「あんだと、てめーーせつかく来てやつたのに、何だよ、その言い草は、ああー？」

生前と全く変わらないあたし達の気の合わなさ。

こんな時なのに、やつぱり別れたのは正解だったのか、なんて思つてしまふ。

その間にも、口を血まみれにした執事は、ズルズルといひちらに歩みを進めてくる。

それを見つめて、孝之はチッと舌打ちした。

「・・・ショーガねえなあ。恵理ー！ちょっとじつとしてろよ
「えー？」

その瞬間、目の前が真っ白になった。

体が突然、動かなくなつて、あたしは思わず座り込む。
昨日の金縛りと同じような感覚だ。

自分の体なのに、自分の力でコントロールできない。
なのに。

あたしが動かしてない筈のあたしの体は、スクッと立ち上がつた。
動かしてない筈のあたしの両手は勝手に組み合わされ、格闘家のよう
にボキボキと音を鳴らす。

「ちょ、ちょっと、孝之ー？コレ何ー？」

『お前の体、借りてる。ちょっとの間、大人しくして』

孝之の声があたしの頭の中から響いてくる。

自分の意思とは無関係に動く自分の体と、テレパシーみたいに響いてくる彼の声。

その初めての体験に、あたしは気分が悪くなつた。

「ジョーダン止めでよー！気持ち悪いじゃん！指鳴らすと太くなるー
！」

『ショーガねえだろ！あいつが人間の体の中にいる以上、こっちも

生身の体で対応しないと。お前はいいから、力抜いてるつて。そもそもないと、自分の手でいやらしい事をせるぞ』

「H口オヤジか！？」

完全にあたしのコントロールから離れたあたしの体は、手始めに屈伸をして、アキレス腱を伸ばした。

両腕をグルグル回して、不自由なく動くのを確認すると、ニヤリと顔を歪ませて笑った。

自分の顔なのに、今までした事もないような悪い顔で笑っているのが分かる。

この二ヒルな笑い方はイケメンの孝之には似合つても、35歳の女子のキャラじゃないだろ！

『すげえ！こんなに上手く融合できたの初めてだ。恵理と体の相性、良かつたからかな？』

感心したような孝之の弾んだ声が頭の中に響いてくる。

「何それ？セックスの相性がいいと乗移り易いの？」

『理由は分かんないけど、いきなり初対面の人へ移ろうとしても上手くいかない。あのひとみたいに動きが不自然になる。コントロールしきれないんだ。ま、俺はお前の体の事は、知り尽くしてるしな。』
「だからH口オヤジか！？って、どーでもいいから、早く何とかしてよ！」

『喚くな。久々の生きてる体だ。なんか気持ちいいじゃん！？』

孝之の支配下となつたあたしの体は、僅か5メートルの所にまで迫つていた執事目掛けてヒラリと躍り掛かると、その首に強烈なラリアットを喰らわせた。

あたしの右腕がイケメン執事の首のヒットして、その体がスローモーションのようにゆっくり背中から倒れてゆく・・・。

それを、あたしは別世界から覗いているような感覚で見つめていた。ドーン！と豪快な音を立てて、執事が床に倒れた後、その周りをボクサーのようなフットワークでピヨンピヨンとジャンプしている。全くもつて無駄なリアクションだが、孝之が久し振りの生ボディにテンション上がってるのは間違いない。

しばらく警戒するように執事を観察していたが、起き上がつてこない事を確認した孝之は、あたしの体で拳を突き上げた。

『イエッス！ノックアウト！』

「でも、また起きてくるんじゃない？トドメ刺しておかないと」

『大丈夫だよ。もうヤツを感じないもん。ホラ、言つだろ？考えるな、感じじろつて。お前は感じてればいいんだよ』

「・・・なんか、やらしいんだけど。孝之が言つと・・・」

その時、執事さんの異変に気が付いて、あたし達はハツとして口を開じた。

床に仰向けに倒れている彼の体から、スウッと煙のような白い気体が湧き上がってくる。

それはやがて、上方に向かつて渦を巻きながら、一人の人間の姿を形成していった。

『・・・誰？この人？』

困惑したような孝之の声があたしの頭に響いてくる。

「・・・だから、この人が執事さんの中に入つてたんだって。あたしに弄ばれたつて言つてた人」

『・・・お前、男の趣味、变つたな』

「だからーあたしは覚えないんだつてば！」

白い煙が消えた後、あたし達の目の前に一人の男が忽然と現わされた。だが。

想像に反するその姿に、あたしは思わず目を見張つた。

それは、さつきの「けいおん！」トレーナーをズボンの中に入れたアキバ系の男性ではなかつたのだ。

さつきの人よりもっと地味で、何の特徴もない中年男性・・・。

「あーーーーー、この人！！！」

今度こそ、その顔を思い出し、あたしは思わず指差して大声を出した。

『何？やつぱり知り合いか？』

「この人、バイトの初日にあたしが押し付けてチョコ売ったオジサンだよ！」

あたしの声に、田の前のオジサンは俯いて顔を背けた。

・・・あのバイトの初日。

全く売れる気配のないワゴンに山積みのチョコレートを前に、あたしと裕香ちゃんはぶーぶー文句を言つていた。

「こんなのが売れるワケないですよ。まだバレンタインまで2週間もあるんですよ。その前に凍え死ぬ~！」

「でも、まあ、これが仕事だし、お金貰つてんだけ」

「もー！松本さんは年の功ですけど、あたしは若いから納得できません！」

「一言多いよ。じゃ、辞める？」

「辞めません！お金欲しいもん！」

「じゃ、しょうがないじゃん？」

裕香ちゃんはぶーたれた顔であたしを上目遣いで睨んだ。

「じゃ、松本さんは売れるって言うんですかあ？」

「う、売れる…営業のやり方次第で卖れない商品なんてないのよ~」「えー、じゃあ、見本見せて下さ~よお。畠つときますけど、チヨ

コつて女の子が買うモノですよ~」

「別に拘らなくともいいんじゃない？最近は軟弱な男子も多いことだし。売れればカモは誰でもいいのよ」

そう言った矢先に、あたし達の囲んでいるワゴンの横を一人の男性がスウ~と音もなく、通り過ぎた。

何の特徴もない地味な中年男性だ。

会社員っぽいベージュのコートに身を包み、顔を隠すように襟を立てている。

中年男性というイメージ以外、顔の特徴は不思議なほど気が付かなかつた。

「松本さん！いいカモじゃないですかあ。松本さんの魅力で、あの人にチヨ「軽~く売っちゃって下さいよ」

裕香ちゃんがニヤニヤしながら、ワゴンの中から一箱掴むと、あた

しに差し出してきた。

「え、だって、チョコって女の子が買つモノでしょ？」

「カモは誰だつていいくて、今、言いませんでした？」

言い返す術もない。

あたしはムカツとして、挑戦状の如く、箱を裕香ちゃんの手から奪い取ると、スーっと歩いていく男性の後を追いかけた。

「すいません！今、バレンタインキャンペーンやってるんですけど、お一ついかがですか？」

男性の前に立ち塞がつたあたしは、できる限りの満面な笑顔を作った。

突然現われたあたしの顔に驚いたように、男性は一瞬、ビクつと体を震わせてた。

その時、あたしにはピンーときたのだ。

・・・この人、慣れてない。

そこに気がついたあたしは更に調子に乗つて、彼の手を取ると、強引に箱を握らせる。

手の感触に引き気味になる男性を、あたしは手に更に力を込めて引つ張つた。

「今は男性から女性にチョコ渡すなんて普通なんですよ。彼女にあげてもヨシ！これからコクつてもヨシ！会社の同僚や上司にあげれば、御機嫌取りは間違いなし！とにかく男性からチョコ貰つたら、女は嬉しいんですから。もーここは、差別しないで誰にでもあげちやいましょう！ささーお一ついかがですか？」

男性は一気にまくしたてるあたしの顔をじばらく呆然と眺めていた。

「の用並みな宣伝では、まだ、落ちないようだ。」

「いつなつたら、女の武器を使ひしかない。」

甘えた声で、あたしは上田遣いに彼を見上げる。

「あたしもチョコ、全然、貰っていないんですけど、お客様のような渋い方から突然、チョコ貰つて告白されたら、きっと好きになつちやうと思つますよ。」私は一発、チョコで告白してみてはどうですかね？」

やがて、一通りの口上を聞き終えた後、男性はあたしが握らせていたチョコの箱を自ら掴んだ。

あたしはそれを、お買い上げの意味だと理解し、歓喜で飛び跳ねた。

「ありがとうございます！お会計は百貨店の一階にありますサービスカウンターで！そちらでラッピングとメッセージカードのサービスも承つております！」

そして、あたしは満面の笑顔をもつて、男性をお買い上げレジに案内したのだ。

その男性がまさか死んでいたとは思いもせぬに・・・。

話を聞いた孝之は、ホラミローーと言わんばかりに勝ち誇った顔をした。

もちろん、あたしの顔で。

『ホラ見ろー一気を持たせるような事言つたのはお前だつたら?』

「何でよーーいろんなのタダの営業スマイルに、リップサービスじゃん

ー。」

『よく言つよ。相手が経験値低めなの見越して、わざとやつたんだ

うひー。』

「やひしこのよ、孝之はー考える事がイチイチ、ネチネチと・・・

いつも通りの口論になつたその時、男性の影がスウッと薄くなつた。

「あ、消えちやう・・・・

『待つて・・・・』

孝之は、強引にあたしの体から飛び出した。

一瞬、あたしの田の前が真っ白になつてから、じんわりと感覚が戻つて来るのが分かる。

自由になつた視界に、あたしより一回つ大きい孝之の背中が見える。孝之は消えていく男性に駆け寄ると、申し訳なさそうに言つた。

「ごめん。俺の彼女が紛らわしいマネして。こいつバカ女だから、アレは止めた方がいい。もつとマシなのこくらでもこるから、今回 の事は許してくれないかな。」

はー?

ドサクサ紛れに、何か、失礼な事言わなかつた？

悪口に敏感なあたしの耳が、ピクッと反応する。

でも、彼が、あたしのことを迷いなく「彼女」と呼んだ事には、ちよつと感動した。

孝之の言葉を聞き終わると、男性は目を伏せて俯いたまま、スウっと搔き消すようにいなくなつた。

後には、「コーヒーカップの破片が散らばる無残に破壊された店内に、あたしと孝之だけが残つた。

もちろん、そこに床に伸びてる執事はカウントしない。

嵐が去つた後のよつた静けさが、再び店内に戻つてきた。

「行つちゃつたよ、あの人。お前に好かれてたと思ってたらしい。俺が現われたから諦めたみたいだ。まあ、その前に男がいるつて分かつて、お前に興味なくなつたみたい」

可笑しそうにクスクス笑いながら、孝之はこつちを悪戯つぼく見下ろした。

「・・・どーゆー意味？男がいや、いけないの？」

「あの人、お前が彼氏いない歴35年の非モテ処女だと思つてたみたいだ。女の子はバージンじゃなきゃイヤなんだつてや。」

「何、その偏見！？人を使い古しみたいに！つてか、非モテ処女だと思つてたつてどーゆー事ですか！？」

使い古しと思われても、35年末使用だと思われても腹が立つ。結局、あたしが彼に対してもつた事を、彼もあたしに対して思つてたつて事か。

お互い様とは言え、あの男にそう思われたという事実は受け入れが

たい。

悶々としているあたしの頭を、孝之の手がポン！と叩いた。

「・・・何？」

「俺の事、呼んでくれてありがと。クリスマス以来だな」

彼の琥珀色の瞳が優しく細められて、ニッコリ笑う。
完璧に美しいその笑顔を見ていると、この男が実は口が悪くて、執念深くて、人の揚足を取る鬱陶しい性格をしている事をつい忘れてしまうから不思議だ。

無意識に赤くなってる顔を、あたしは彼に気付かれないように慌てて横を向いた。

「・・・そーだよ。あのクリスマスの夜から、あたし、何度も電話したんだから。でも、繋がらなかつた。」

「ゴメン。繋がる事は稀だよ。だつて俺・・・」

「・・・いいよ、言わなくて。もう知ってる。」

「・・・死んでるから。」

その言葉を彼の口から言わせたくなくて、あたしは敢えて遮った。

彼は困った顔で少し笑って、頭を搔く。

悪戯がバレた子供みたいにな照れ笑いがかわいい。

「知ってるなら話は早いな。まあ、そういう事。でも、普通、見えないんだけどな。姿が見えて、体に触れて、エッチまでできるのは恵理が初めてだ。お前がそういう体质なんじゃない？」

「・・・執事さんにも言われた。あたしつて、リアルに見える体质なんだつて。」

「さっきの男の人だつて、普通、あんな事できないよ。お前の「見える」能力が、靈を強化しちゃうんだよ、きっと」「・・・それって、あたしが相手だつたから、更に攻撃力がアップしたつて事?」「

つまり、無意識に敵に塩を送つてたといつ事か。

「冗談じやない!」

今後もこんな事があつたらどうする!?

ただでさえ、死んでる人なのか、生きてる人なのか区別がつかないって言うのに・・・。

あたしの不安を顔色で感じたのか、孝之がそつとあたしの耳に顔を近づけた。

彼の息が耳にかかるつて、あたしの胸がドキンと鳴る。

「その時は、また呼べよ。俺が守つてやる」
「・・・・！」

甘いセクシーな孝之の低音ボイスが、乙女キラーな台詞を奏でた。ドキドキに胸が痛くて、あたしは思わず目を瞑る。

当然、来るであろう彼からのキスを待ちながら・・・。

しばしの沈黙の後。

期待していたシチュエーションになかなかならなくて、あたしは業を煮やして薄目を開けた。

「・・・あれ?孝之?孝之、どこー?」

「いない!?

さつきまで、確かにあたしの横にいた孝之の姿が忽然と消えていた。また一人にされてしまった喪失感に、あたしはヘナヘナと座り込む。

この一連の騒動は、夢だったのかな？
いや、そんな筈はない。

この破壊された店内が、ここで何があつたかをリアルに物語つくる。

あたしは、彼に逢つたら言おうと思っていた事が、また言えずに終わってしまった事を思い出した。

まだ、怒ってる？

ごめんね。

あたしもやつぱり好きだよ。

たとえあなたが、顔に似合わぬチフツくて、頑固オヤジだとしても・・・。

「孝之、来ててくれてありがと・・・」

あたしは天井を見上げて、そう呟いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8925z/>

靈幻彼氏

2012年1月5日21時52分発行